

『なめとこ山の熊』は翻訳文学である。

そして、書く「ぼく」って何？

——宮沢賢治『なめとこ山の熊』にかける橋(1)——

高木 信

一、『なめとこ山の熊』の行方は

宮沢賢治『なめとこ山の熊』は、高校国語教科書の定番であった。しかし二〇二二年度からの新学習指導要領のもとで作られた高校国語教科書をみると、二〇二二年刊行の三省堂『新 言語文化』だけが採用している。「文学国語」に入れられるのかと思っていたが、ホームページで参照したかぎりなかった^①。

草稿をもとにした本文で、推敲の余地がまだまだあるのが『なめとこ山の熊』というテキストである。しかも、冒頭部分で語り手「私」(テキストの語る主体と言ってもよいが、「私」や書く「ぼく」よりも審級が高く、テキストを統括するものを「語る主体」と呼ぶべきである

ので、本稿ではひとまず「私」を語り手とする)が、

①本当はなめとこ山も熊の肝も私は自分で見たのではない。人から聞いたり考えたりしたことばかりだ。まちがっているかもしれないけれども私はそう思うのだ。

という、投げっぱなしの態度で物語内容を語りはじめるのである。^②

『なめとこ山の熊』を読むとき、意味がわからないところや語り方、物語内容への疑問については、「推敲されていないからしかたがない」とか「このエピソードは、語り手が想像している箇所であろうから嘘かもしれない

い」と逃げを打つことができる準備をテキストはじめから用意してくれている。しかしこのテキストを教室で読むとき、教師がすぐにこの〈逃げのカード〉を切ってしまったら、あるいは「主体的で、能動的な」生徒が「ここは嘘である」と主張してしまったら、そこで思考（深い学び）は停止してしまうだろう。

教科書国語教材は、「今—ここ」にある本文がそのままで読めることを教室の構成員と契約していなければならないだろう（解釈に諸説があることは別の問題である）。「ここは想像で、ここは聞き書きではないかなあ？」ということを議論する場として、教室は存在してはならないだろう。なぜなら『なめとこ山の熊』には、〈真／偽〉を切り分けるコードがどこにも存在しないからである。

文学教材には、「謎」を含むもの（テキストにある情報で謎解きができるような謎ではない「謎」である）が好まれて採用されていると、高木 [2021] でも指摘した。しかし、『なめとこ山の熊』は「謎」だらけなのである。さすがに教科書から消えていってしまったかとは思えない。とはいえ、永らく教科書に載ってきたものでもあるし、現在一社しか採用していない教材ではあるが、この先復活する可能性もあるので、きちんと議論すべき箇所

について記しておきたい。

二、なめとこ山の「熊」の行方は

テキストの時間軸をこれから考察していくことになるが、まずは『なめとこ山の熊』における「熊」の行方について書いておきたい。

「なめとこ山の熊のことならおもしろい」と語りはじめる語り手は、「昔はその辺り「なめとこ山の太空滝の辺りか」には熊がごちゃごちゃいたそうだ」と、猟師・淵沢小十郎が死亡する前の出来事を伝聞形式で語る。そして小十郎が死ぬまでに、「熊捕の名人の淵沢小十郎がそれを片っ端から捕ったのだ」とする。「片っ端から」とは『日本国語大辞典』によれば、

- (1) 端の方からつぎつぎと。手当たり次第に。
- (2) 端のほうまで全部。

とある。「片っ端から」獲物の熊を捕るのは、狩人としてはやってはならないことだろう。なぜなら、山の熊という資源が枯渇することを意味するからだ。しかし、

小十郎は「なめとこ山の熊で赤い舌をべろべろ吐いて谷を渡ったり、熊の子どもらが相撲をとっておしまいぽかぽか殴り合ったりしている」のを「片っ端からとったのだ」と語られると、親熊から小熊まですべて捕ったことになる。語り現在においては、「なめとこ山の大空滝」の辺りにもはや熊はいない。昔は熊が「ごちゃごちゃいたそうだ」が、それは逆に「今」は「ごちゃごちゃ」とは（へいない）ということを示している。

テキストの最後の場面で、死亡した小十郎の死体を「黒い大きなもの〔熊〕がたくさん」で囲んでいるときの熊たちは、「なめとこ山」の最後の「熊」である可能性がある。その「たくさん」と言われる「熊」たちはしかし、その後「なめとこ山」をかつてのように占拠するような数を維持できないくらいの頭数でしかなかったということだ。なめとこ山の熊たちはほぼ絶滅させられたわけだ。

熊たちと獵師・小十郎との共感の世界のように語られる『なめとこ山の熊』だが、獵師（そしてその家族たちもたぶん^③）も、そして山の熊もが絶滅するテキストなのである。

三、語る「私」の時空は

熊や獵師一家の絶滅小説であり、小十郎の死後、なめとこ山の環境が大きく変化したあとに「私」が語りはじめるのが『なめとこ山の熊』というテキストである（昭和初期に『なめとこ山の熊』という作品を書いたのは宮沢賢治という作家であるが）。

引用文①にあるように、語り手の「私」は現地を知らない。伝聞（書物も含まれるのではないだろうか）と想像とをもとに「私」が再現し表象したのが『なめとこ山の熊』である。「私」が最終的な語り手であるというのは、

② 中山街道はこの頃^{なかやま}は誰も歩かないから、路^{みち}やいたどりがいっぱいに生えたり、牛が逃げて登らないように柵を道に立てたりしているけれども、そこをがさが三里ばかり行くと向こうの方で風が山の頂を通っているような音がする。気をつけてそつちを見ると、なんだかわけのわからない白い細長いものが山を動いて落ちて煙を立てているのがわかる。それがなめとこ山の^{おおぞら}大空滝だ。そして昔は^{おの}その辺

には熊が「こちやこちやいたそうだ。」〔中略〕とにかくなめとこ山の熊の胆は名高いものになっている。

腹の痛いものにも効けば傷も治る。鉛の湯の入り口になめとこ山の熊の胆ありという昔からの看板もかかっている。

とあるように、「私」が語っている〈語りの現在〉は「この頃」とされ、熊たちが大空滝の辺りに「熊がこちやこちやいた」時期を「昔」とすることからも言えよう。そして熊たちがいた場所を「その辺り」という指示語で語る。

小森〔1996〕・大塚〔1999〕は、小十郎が熊を捕っていた時期を、つまり物語内容の現在を、金物屋に置いている「金天狗やカメレオン印のたばこ」や「木はお上のものに決まったし」という小十郎の発話から明治三三年から三七年（一九〇〇～四年）としている。そして多くの論者は語りの現在を作家・宮沢賢治が『なめとこ山の熊』という作品を書いていた昭和初期としている。

しかし、このテキストには語り手「私」と書き手「ぼく」とが存在しており、テキストをひとつの構造体として構築しているのは語り手「私」である。語りの現在（「私」

の時間）と作家が作品を書いた時間とは無関係である。明治三十年代の風景が大きく変わったものの、牧場が運営できる平和な時期がひとまず語りの現在であろう。

その語りの現在において、過去のことを聞いたり想像したりして語っているのが「私」である。畦地〔2019〕は三人称の語り手の他に、「私」と「ぼく」という語り手がメタレベルから介入しているとするが、このテキストは三人称小説ではない。「私」の語りによって成り立つ一人称小説である。作家・宮沢賢治を介入させず、誰が「私」の語りをが文字化して記したのかという小説化のプロセスなどを問題にしないためには、「私」が『なめとこ山の熊』というテキストを最終的に完成させた（音声言語で）とせねばならない。われわれが文字で『なめとこ山の熊』を読めるようになったことを、「私」の語りを誰かが筆記したとするテキストから還元できないステップを考えることはやめよう。語りによるテキストの成立と、小説として読めるような形になっていることとは位相が違うのだ。『なめとこ山の熊』というテキストを「私」の語りをもとにして筆記した実体的な主体について考えることに意味はない。「私」「僕」「小十郎」「熊」「小十郎の家族」「なめとこ山」からすれば、その

ような主体による言語化は〈虚構〉の次元での出来事でしかない。別次元であり、虚構世界において起こっていることだ。『なめとこ山の熊』というテキストは「私」が語ることで織り上げたものである。われわれがそれを読めるのは、こちら側のたんなる作業の結果でしかない。書かれたテキストなのに、「私」が語り手というのは矛盾していると言うとしたら、それは別次元のものを同一平面に置いてしまったがゆえの過ちである。

さて本文にもどうだろう。傍線部はあたかも「私」が見た風景のように読めるが、波線部「そうだ」や人づてに聞いた話して小十郎と熊たちの物語を再構築していると「私」が主張している以上、最近のなめとこ山を見てきた存在の発話を自由直接話法的に（傍線部）語っていることがわかる。

また、諸説入り乱れる「なめとこ山の熊のことならおもしろい」という「私」の言説だが、坪井〔1988〕が指摘するように、聞き手を想定した発話であろう。加えて、「なら」という語が使用されることで、「おもしろくない」話題群に対して、「おもしろさ」においては抜群の話題を提示しようとしていることがわかる。複数の人間たちが「おもしろい」話しを次々と語っているが、そ

れほど「おもしろくない」と判断された「私」の話し群、もしくは参加者全員が「おもしろくない」話ししかできていない情況下で、「私」が渾身の一撃として繰り出すのがこの『なめとこ山の熊』の話しということだ。

※

「私」の語りは、いわゆる「共通語」的なもので、方言は使用されない。方言的な言葉を使用するのは、小十郎、荒物屋の主人だけである。小十郎は熊を撃ち殺したあとは方言を使うが、その小十郎も熊と会話するとき（熊も同じく）共通語的な言語を使用している。^④ 死の瞬間の発話「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、許せよ。」が共通語的言語であることは、熊たちとの対話が可能となったあとの出来事であるから、別に考える必要がある。

③ 「熊」「おまえは何が欲しくて俺を殺すんだ。」

「小十郎」「ああ、俺はおまえの毛皮と、胆の他はなんにもいらぬ。〔中略〕けれどもおまえに今頃そんなことを言われると、もう俺などは何か栗かしだのみでも食っていて、それで死ぬなら俺も死んでもいいような気がするよ。」^⑥

これは熊の言葉と小十郎の言葉と「私」の言葉が、そして「ぼく」の書く言葉が、なめとこ山周辺の人々の言葉と異質であることを示すだろう。熊と話すときの小十郎を共通語的な言葉で表象するということは、熊の言葉を共通語的な言葉に翻訳しているということではないか。では「私」の言葉はどうなのであろう。熊語を翻訳した「近代―日本―共通語」なのか、あるいは熊語なのか。これは別に考察する必要がある。

さて、「私」はどこで語っているのであろうか。なめとこ山に行ったことがないのであるから、遠く離れた地なのであろうが、共通語的な言葉で語る必要がある場所に身を置いているとしか言い様がない。東京周辺かもしれないし、方言を使用せずに語りあう場で語っているかもしれない。たとえば、江戸落語が日本のどこへいっても東京弁で語られるようにである。しかし、もし「私」が熊語で語っているのだとしたら、日本のどこかの山奥で熊たちを相手に「おもしろい」話しを披露し合っている可能性もあるわけだ。

ここで、語り手である「私」が、「私」と語る場面を整理しておこう。

A 引用文① 「私」が実際にはなめとこ山も熊の

胆も見たことがないと告白する場面と続けて「私はそう思うのだ」と断言する場面で二回「私」と言う。

B

④ 「これが死んだしるしだ。死ぬときに見る火だ。熊ども、許せよ。」と小十郎は思った。それからあとの小十郎の心持ちはもう私にはわからない。」

小十郎の死に際を語る場面で「私」という呼称は現れる。テキストの冒頭部と終末部とに現れることで、このテキストを「私」が粹取りしていることが示される。

「私」は計三回出現する。昔は「熊がごちゃごちゃいたそうだ」と伝聞式の語り方を最初はすることもあった「私」だが、次第に伝聞調や推定的な語りはなくなり、断定的な語りでテキストを紡いでいく。

⑤ あんまりいっぺんに言ってしまったて悪いけれども、なめとこ山あたりの熊は小十郎が好きなのだ。

その証拠には、熊どもは小十郎が〔中略〕通るときは、黙って高いところから見送っているのだ。〔中略〕おもしろそうに小十郎を見送っているのだ。全く熊どもは小十郎の犬さえ好きなようだった。

聞き手を意識しながら（「悪いけれども」、熊の内面を語る（「言ってしまったて」）のが「私」だ。そして「私」は小十郎の心持ちもわかるのである。引用文④で死亡したあとの小十郎の気持ちはわからないとするが、逆に生きている小十郎の心持ちはわかると主張していることになるわけだ。「私」がこのように、小十郎や熊の内面を語ることが可能となる理由についてはのちに考察する。そして、「犬さへ好きなようだった」と「犬」については熊の心情を推定するしかないことも説明できるような枠組を提示してみよう。

四、書く「ぼく」の時空は

『なめとこ山の熊』で「ぼく」と自身を呼ぶのはひとまず、二人いる。書く「ぼく」と「ぼく」と発話する子熊とである。

伊藤〔2023〕の座談会で、「語り手は熊ではないか」という私見を述べた。その点について考察していきたい。

多くの論者が、「私」「ぼく」を語り手と認定している。あるいは両方ともに作家である宮沢賢治のテキストへの介入とする論者もいる。「私」を語り手とし、書く「ぼく」を宮沢賢治とする説もある。

しかし、前節で「私」の所属する時空は、小十郎の死後からいくらか経た時間であり、なめとこ山から遠く離れた場所であるとした。それに対して、「ぼく」は小十郎の近くにいる。書く「ぼく」が出てくるのは二箇所である。小十郎が熊を解体する場面（引用文⑥）と荒物屋の主人に「うまくやられる」場面（引用文⑦）である。引用しよう。

⑥ 小十郎は懷から研ぎすまされた小刀を出して、熊の顎のところから胸から腹へかけて皮をすうとと裂いていくのだった。それからあの景色は**ぼく**は大嫌いだ。

⑦ けれどもこんな嫌なずるいやつらは、世界がだんだん進歩するとひとりで消えてなくなっていく。

「ぼく」はしばらくの間でも、あんな立派な小十郎が、二度とつらも見たくないような嫌なやつにうまくやられることを書いたのが、実にしやくにさわつてたまらない。

ここで突然現れる「ぼく」は書く主体である（二重傍線部）。引用文⑥「そのあとの景色」つまり熊の解体については詳述しない。また「そのあとの景色」という言説は、今回はじめて見る景色ではないことを示していると言えるのではなからうか。また引用文⑦「あんな立派な小十郎」とは「私」が伝聞して語った、山中を「まるで自分の座敷の中を歩いているというふうで、ゆつくりのつしのつしとやって行く」姿などを指しているのである。また「二度とつらも見たくないような」とは最低でも一度は面をみていると読める。つまり、書く「ぼく」は小十郎の近くからその姿や出来事を見聞きし、それを書き記しているということである。「私」の語る現在が小十郎の死後いくらかの年月を経てからであるのに対して、書く現在は小十郎生前なのか死後なのかは不明ではあるが、「ぼく」は小十郎の生きた時期、身近でもに生きていたと言つてよからう。

「私」が「人から聞いたり」とする情報源のひとつとして「ぼく」が書き記したテキストがある。なぜなら「ぼく」が書いた情報を「私」が語ることでテキストが織りなされているからである。

小十郎のすぐ側において、小十郎の行動を見聞することができたのは誰だろうか。山での姿を見知っているのは家族ではない。猟犬が考えられるが、『なめとこ山の熊』というテキストにおいては、犬が話す言語はない（引用文⑨傍線部）。また、犬は観察される対象としてしかない。

⑧ 犬は先に立つて崖を横ばいに走ったり〔中略〕体をぶるぶるっとして毛を立てて水をふるい落とし、それから鼻をしかめて主人の来るのを待っている。

⑨ いきない犬が火のついたようにほえだした。〔中略〕犬がその足もとにかみついた。

そして小十郎の死後、犬にかんする言説はなくなる。小十郎と熊とは言語を共有するようになるのに、小十郎の子どもが死んだあとも元気に狩猟に携わった犬は名前すら与えられることなく、テキストから放擲されている。

五、もう一人の「ぼく」は

ここで「ぼく」という呼称について考えよう。語り手「私」の使用する言語とは異質な言語で話すのが熊の親子なのだが、その子熊が自分を「ぼく」としている（引用文⑩四角囲い部）。

⑩ 「子」「どうしても雪だよ、おっかさん。」「中略」
「母」「いいえ、おっかさんはあざみの芽を見に昨日あすこを通ったばかりです。」「中略」「おかあさまはわかったよ、あれねえ、ひきざぐらの花。」「なあんだ、ひきざぐらの花だ。」「ぼく知ってるよ。」「いいえ、おまえはまだ見たことありません。」「知ってるよ、ぼくこの前とつてきたもの。」「いいえ、あれひきざぐらでありません、おまえとつてきたのきささげの花でしょう。」「そうだろうか。」「子熊はとぼけたように答えました。

『なめとこ山の熊』において「ぼく」を使用するのは、書く「ぼく」と子熊とに限られる。熊の遺体を解体する場面の直後に、熊の親子の対話が挿入されるのだが、小

十郎が熊語を理解できるようになるということは、熊たちの世界に入り込むことができるということだ。それは逆に、熊たちが小十郎の話す人間の言葉を理解する事始めともなるだろう。

⑪ 「熊」「おまえは何が欲しくて俺を殺すんだ。」

「小十郎」「ああ、俺はおまえの毛皮と胆の他にはなんにもいらぬ」「中略」「けれどもおまえに今頃そんなことを言われると、もう俺などは何か栗かしだのみでも食っていて、それで死ぬなら俺も死んでもいいような気がするよ。」「熊」「もう二年ばかり待ってくれ、俺は死ぬのはもうかまわないようなんだけれど、少しし残した仕事もあるし、ただ二年だけ待ってくれ。」

この熊と小十郎との対話は「熊語」でなされているはずだ。しかしここには、熊たちが人間語を理解する契機があることを忘れてはならない。熊の世界へと参入した小十郎によって、熊たちが人間語を理解する可能性が拓かれるのである。小十郎と熊たちとが相互に（生成変化）したのが「なめとこ山」世界である（犬は生成変化

できなかった)。熊でもあり小十郎でもある(もの)に、熊も小十郎も(なった)ということだ。

このような熊でもあり人間でもあることが可能となる世界が発生したとき、子熊は小十郎に憑在し、小十郎に起こった出来事を「熊語」で〈書く〉ことができるようになる。

熊の死体が解体されるのを書くことを嫌悪し、小十郎を「立派」だと思つて(好きで)いるのは『なめとこ山の熊』の世界では熊だけである。その上で「ぼく」と名乗るのは「子熊」だけである以上、書く〈ぼく〉は「子熊」でしかない。子熊が小十郎にとり憑いたことで、それは可能になる。

この熊語のテキストや熊たちの伝承を参照して(もちろん、他に人間たちの伝承も使用しただろうが)語るのが「私」である。そのとき「私」もまた熊世界に入り込むことになるだろう。そのような「私」は、熊語でなされているであろう熊と小十郎との対話(引用文^⑪)や、小十郎を殺した熊の発話(「おお小十郎おまえを殺すつもりはなかった。」を翻訳できるようになっていることからそう言える。

なめとこ山から遠く離れ、共通語的言語を使用するこ

とで、「私」は熊語の人間語への翻訳者という二重所属者の位地を確保している。

『なめとこ山の熊』は、熊語を人間語へ、そして熊語のテキストを日本語のテキスト(しかも共通語的言語)へと翻訳したテキストなのである。

語り手「私」と書く「ぼく」とを分け、「ぼく」と自称する書き手と子熊とに着目すると、このような結論になる。^⑧

六、動物たちと言葉を共有するとは

さて、熊たちと小十郎との言語の共有はユートピア的な世界なのであろうか。手塚治虫『ジャングル大帝』では、アフリカに墜落した飛行機に乗っていた日本人から日本語を学んだレオたち動物たちは共通言語として日本語を使用し、食物連鎖を断つためにベジタリアンになる(苦しみながら、身体を改変するのであった)。しかしその結末は、人間のために身を投げ出しレオが死ぬことになる。

小十郎が熊語を理解する(と思い込まれている…小十郎に、そして「私」に)切っ掛けとなつたのは、熊の親

子の対話（引用文⑩）を見たことである。それは「小十郎はもう熊の言葉だつてわかるような気がした」と「私」によって語られる。

熊の言葉が「わかるような気」がするようになって、引用文⑪のように小十郎は熊を殺すことの意味がわからなくなるのだが（そしてその熊もすでに生きる意義を失っていることがわかるのだが）、それは今は論じない。ここではもはや「わかるような気がした」ではなく、わかっているのである。小十郎は熊語の世界に参入しているわけだ。

そして引用文⑪での二年後に死ぬ熊との会話で、小十郎は自身の生業に疑問を持つようになるのである。

熊捕りの名人である小十郎をすぐさま「マタギ」とすべきかは議論があるだろう。ここでは「マタギ」の風俗を参考にして、猟師・小十郎のあり方を考えてみよう。

マタギたちは山では「山ことば」を使用する（その一部は戸川 [2021] で確認できる）。それは獲物に猟師の話していることを理解されないためだという。狩るという実利を得る行為においては、共通の言語を持つことは障害になる。逆に、熊の言語を身につけることは猟師にとつては情報量が多くなるので得になるはずだ。が、殺

す相手と対話が可能となることは猟師・小十郎にとつて、他者＝熊の内面を知ることとなり、熊を殺すことの意味を問い直さざるをえなくなる（今福 [2019]）。この問題については、ひとまずはここまでとしよう。

小十郎が熊語で対話が可能となるということは、引用文⑪の対話が熊語でなされているということである（熊たちが人間語を学ぶ・知る機会についての記述はない）。この熊語での対話を人間語に翻訳しないと、『なめとこ山の熊』というテキストは成立しないことを再確認しておきたい。だから、「私」もまた〈熊〉であるという仮説は捨てきれないのである。

七、子熊が植物の名前を言えることは

ここで引用文⑩の子熊と母熊との対話にもどころ。この二人の対話は『なめとこ山の熊』のなかではついぞ見られたことのない言語運用がなされる。丁寧語（引用文⑩波線部）を使用した共通語的言語が使用されるのである。優雅な親子の会話と言ってよからう。この文体の異質さは、語り手「私」の言語運用にも影響を与える。波線部「答えました」とあるように、敬体で語る語り手「私」

に変化している。熊親子の言語を語るとき「私」の言語も変質する。語り手「私」の言語が変化する場所は一箇所ある。殺すのを二年待つてくれと言った熊が二年後家の前で死んでいるのを小十郎が発見した場面である。

始終見たことなる赤黒いものが横になっているのでした。ちょうど二年目だし、あの熊がやって来るかと少し心配するようにしていたときでしたから、小十郎はどきっとしてしまいました。そばに寄って見ましたら、ちゃんと、あの、この前の熊が、口からいっぱいに血を吐いて倒れてた。小十郎は思わず拝むようにした。

熊を語るときには独自の語り口があることを示している箇所と言つてよからう。「私」の言語によって共通語的に語られるテキストに、別の言語体系（伝承の、そして熊語の）が潜在化させられていることが明示化される箇所である。熊語の書かれたテキストの書き方がそのまま「私」の語りに出現したということである。そしてそれは、「私」が語る対象によって自身の言語が変質する

（熊への生成変化）ことも示している。

引用文⑩は、千葉「2003」がこの対話について、子熊が言語を獲得していく過程であると論じた箇所でもある。子熊が「おっかさん」と言ったのを、母熊は「おっかさんは〔中略〕通ったばかりです」と繰り返したあとで、「おかあさま」と自身を呼び直している。これをして、子熊に「おかあさま」という言い方を教育していると言つてもよからう。

ただし植物についてはどうであろうか。たしかに「植物（実態）―植物名（命名）」の対応を母熊は子熊に教えている。子熊が世界を分節化していくプロセスと言つてもいい。だがより重要なのは、熊の親子が人間の使用する植物名を語っているところにあるだろう。熊たちの世界の分節化、世界の把握の仕方、言語体系が人間のそれと同じはずがない。熊たちは、人間が「ひきざぐらの花」と呼んでいるものを、同じように「ひきざぐらの花」と呼ぶわけではない。

ではここでなにが起きているのであろうか。熊たちが「ある植物」を「¥%#\$&」と言っているのを、人間のそれも日本人の共通語的言語に（翻訳）して「私」が再現＝表象していると考えるしかない箇所であろう。小

十郎が「もう熊の言葉だつてわかるような気がした」とされ、やがて熊と対話するときの言語も〈熊語〉であった。それを翻訳して語るのが「私」という語り手なのである。⁽⁹⁾

以上論じてきたことは、語る「私」と書く「ぼく」との語りの現在と書く現在とは違うということを出発点としている。語る「私」が人間語で昔の小十郎が死亡する前後までを、伝聞と想像で語ったと言っているが、そのニュース・ソースには、書く「ぼく」が書き残したエクリチュールがあつたはずである。そして「ぼく」と自身を呼ぶのが子熊と書く「ぼく」とだけであること、小十郎が熊語を学ぶ（真似る・身に付ける）切っ掛けとなつたのが子熊親子の対話であつたこと、子熊親子が敬体の共通語的言語を使用することなどから、書く「ぼく」は子熊であることを論じてきた。このような現象は、熊へと生成変化する小十郎、小十郎へと生成変化する熊たちによって可能となるのであつた。そして熊語でなされる小十郎と熊との対話や熊語で書かれたであろう「ぼく」によるエクリチュールを、人間語に翻訳することが可能な存在がいてはじめて『なめとこ山の熊』というテキストは発生可能となるのである。本稿はここでひとまず終

わることとする。

八、他に論すべき点は

ここで紙幅も時間も尽きてしまった。ひとまず現時点で残っていると思う課題をあげる。

○小十郎が荒物屋の主人に売りにいったのが熊の毛皮だけであること。

語りの現在においては「名高いものになつている」熊の「胆」である。昔から「熊の胆あり」という看板はかかつている。しかし、この看板は小十郎が生きていた頃にもあつたのだろうか。「昔から」と言われる「昔」と「昔はその辺りに熊がごちゃごちゃいた」と言われる「昔」は同じ時間を指しているとは限らない。

○地の文にとつぜん現れる「もんだ」言説。

「私」が共通語的言語で表象するのが『なめとこ山の熊』というテキストだが、荒物屋の場面で突然「もんだ」言説が出現する。

・小十郎はしばらくたつてから、まるでしわが

れたような声で言ったものだ。

・小十郎はそう言いながら改めておじささえもしたものだ。

この「もんだ」言説が現れる荒物屋の主人との交渉の場面には、書く「ぼく」が登場してくる。

○「熊」が小十郎を憎まない理由について。

テキストでは荒物屋の主人にしてやられる（熊の皮二枚を二円で買ったたかれ、懐柔される）小十郎の姿を描いたあとに、「こんなふうだったから、小十郎は熊どもは殺してはいても決してそれを憎んでいなかったのだ」とされる。荒物屋の主人に「うまくやられる」ことで「憎んでいなかった」とあるが、〈憎んでいない〉ことと、「なめとこ山あたりの熊は小十郎を好きなのだ」とある〈好きなのだ〉こととは、同じなのであろうか。前者は書く「ぼく」の言説を密着して登場している、後者の「好きなのだ」は語る「私」の言説のなかに現れている。きれいに分節化はできないものの、「ぼく」の書く内容と「私」が語る内容とは別位相にあると考えるべきではないだろうか。

○「因果」を真面目に論じることをめぐって。

小森「1906」が小十郎が熊を捕るしかないのは、日本という近代資本主義国家から小十郎一家が疎外されていることに原因があるとしている。しかし明治三十年代に小十郎（母親は九十、孫たちからは「爺さん」と呼ばれている）は何歳なのだろう。四十歳のときに息子夫婦をなくした小十郎だが、孫たちはまだ猟にでられる年齢にはなっていない。孫は五人なので、小十郎が四十歳のとき長子は最低でも五歳。その子がまだ猟に出られない、家内労働ができないとすると、物語現在で十歳くらいであろうか。とすると小十郎は四五歳前後であろう。母親が四五歳のときの子どもとなる。兄弟姉妹のことはわからないが末っ子に近い子どもなら、四五歳のときの子どもということもありえる。一五歳から猟に出ていたとすると、明治初期には猟師をしていたと考えられる。孫や小十郎の年齢をもう少し引き上げると、幕末には猟師になっていたとすることも可能である。

小十郎は近代国家成立以前から猟師の一族として生きていたはずである。山の木が自由に伐採できたとしても、小十郎一人で生活できるほどの木を切り

倒すことができただろうか。炭焼きにしても副業程度もしくは、炭焼きをしながらも猟師をせねば生きていけなかったであろう。猟師からの転職が不可能だという程度で「しかたなしに猟師なんぞ」（後掲引用文・傍線部）しているわけだ。小十郎が疎外されているのは〈常民〉からなのだ。まずこの点を確認して〈因果〉についても考えねばならないだろう（後掲引用文・四角囲い部）。宮沢賢治は法華経を信奉していたので〈因果〉を仏教的な文脈で捉えなくてはなる。

「小十郎」「熊。俺はてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ。俺も商売ならてめえも撃たなければねえ。他の罪のねえ仕事していんだが、畑はなし、木はお上のものに決まったし、里へ出て誰も相手にしねえ。しかたなしに猟師なんぞしるんだ。てめえも熊に生まれたが因果なら俺もこんな商売が因果だ。やい。この次は熊なんぞに生まれなよ。」

「因果」にはもちろん「因果応報」の「因果」であるが、他にも意味がある。「因果な商売」と言うときに《不幸。不運。ふしあわせ》という意味にな

る（『日本国語大辞典』）。小森 [1936] は小十郎の「因果」を「近代の人為そのものがつくり出した」(p.143) ものとするが、仏教伝来以来殺生を生業とする者たちが感じ続けた「罪悪感」なのである。謡曲《善知鳥》《鶉飼》などでも語られてきた猟師・漁師が殺生の罪で地獄に堕ちねばならないという「因果」として捉えるべきであろう（高木 [2020] 参照）。

○「ぼく」の言語と「私」の言語との融合と乖離について。

『なめとこ山の熊』を語る「私」は共通語的言語を使用するが、書く「ぼく」の言語はそれと差異をいくらか持っている。が、このふたつを切り分けることは可能なかどうか。移り詞（語り手の発話と登場人物の発話（心内語）が連続して続いていく現象）のように両者は癒着していないだろうか。そのとき「私」は「ぼく」へと生成変化していくのではなからうか。

○熊たちによる小十郎葬送の場面が暗示するものはないか。逆イオマンテの可能性はあるのだろうか。

イオマンテは熊の魂を天へと返す祭りである。そ

のときにも熊肉を人間たちは食べる。狩猟対象である熊への感謝の祭りである。なめとこ山の熊たちが、死亡した小十郎を囲み「回々教徒の祈るときのようにじつと雪にひれ伏したまま、いつまでもいつまでも動かなかった」とある。小十郎の魂を天に返す儀式のようなが、小十郎は熊を殺す側である。熊たちが小十郎に感謝の念と鎮魂を行う意味をイオマnteとの直接的な関わりでは説明できない。ここにある〈殺す―殺される〉非対称的な関係から、熊たちの沈黙の祈りを説明せねばならない。

○「国語総合」と「言語文化」との差について。

発問やいわゆる「学習の手引き」、指導書の記述の差異について、学習指導要領が変わることでのような変化が起きているのかの検証は必要である。

※

最後駆け足に残された課題を羅列して本稿を閉じることにする。『なめとこ山の熊』にかんする研究史は膨大にあるが、すべてに目を通すことは叶わなかった。本稿と重なっている（すでに論じられている）論考もあるかもしれない。またすでに定説となっている論を知らないばかりに繰り返しているかもしれない。ご批評のほどを

お願いする次第である。

すべての論点を一気にそしてリゾーム状に論じることができなかった点もお詫びしておく。『なめとこ山の熊』にかける橋(2)を準備したい。

【注】

(1) 「文学国語」の教科書を見ると、中島敦「山月記」、夏目漱石「こころ」、森鷗外「舞姫」は安定的で、準定番的な村上春樹、太宰治、小川洋子の諸作品が採用されている。そこに新教材が散らばるよう配置されている。上手にやっている教科書会社は、『源氏物語』『平家物語』などの古典作品（漢文は除く）を掲載し、「古典探求」の一部を補えるようにしている。

(2) 「そう思う」の「そう」の指示内容も不明である。直前を指すとする、「まちがっているかもしれないけれど（省略）」の省略箇所にはいる、「正しいと思うのだ」が指示内容となるだろう。もう一つの可能性は、最初の一文（な）が「おもしろい」のかわからないので議論が起きる箇所でもある（

(3)

「なめとこ山の熊のことならおもしろい」を指すというものである。「そう思う」ことがなにかも決定できないようなテキストなのである。

テキストには、「小十郎が四十の夏、うち中みんが赤痢にかかってとうとう小十郎の息子とその妻も死んだ」とか、「山には栗があつたし、後のまるで少しの畑からは稗がとれるのではあつたが、米などは少しもできず味噌もなかったから、九十になる年寄りと子どもばかり七人家内に持つていく米は、ごく僅かずつでも要つたのだ」とある。また、小十郎のセリフには「畑はなし、木はお上のものに決まつたし、里へ出て誰も相手にしねえ。しかたなしに獵師なんぞするんだ」とある。小十郎が死亡したあと、この家族たちの生活は立ちいかなくなるだろう。

小十郎が死を積極的に受け入れたとしたら、あるいは小十郎の死を美しいと思う者は、七人の老人と子どもたちの死を顧みていないということだ。

(4)

「熊、俺はてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ。俺も商売ならてまえを撃たなけあならねえ」と発

(5)

話している。ここでは小十郎が熊を捕るのを「商売」と規定していることを覚えておきたい。荒物屋の主人も商売をしているのであり、小十郎も「商売」をしているのである。熊たちだけは「商売」をしていない。

直接話法は、昔、彼は「今。なめとこ山には熊がたくさんいる」と言つた。と、登場人物の発話と語り手の発話とを明確に分けるものである。それに対して自由間接話法は語り手が登場人物の発話をそのまま語るものである。今、なめとこ山には熊がたくさんいる。と登場人物の発話をそのまま語り手が提示するのが自由直接話法である。誰かの発話を語り手の声で語ることによつて、読者には一人称現在として語り手の声と登場人物の声が届けられる。伝聞した言葉を、自由直接話法によつて語ることで、『なめとこ山の熊』の語り手「私」が語る物語があたかも「私」が見聞きした出来事のように読めてしまうのである。

このことは、現在のなめとこ山のついでの情報だけではない。かつて起きた小十郎死亡へと至る物語も、伝承者が一人称過去もしくは一人称現在

(6)

で語ったはずの発話（もしくは書記言語）を、語り手が一人称過去で語ること、あたかも語り手「私」が実際に見聞したかのような表現効果がえられる。きれいに分節化できないが過去を語る「私」は自由直接話法と自由間接話法とを駆使しているのである（高木 [2020] 参照）。

小十郎のこの発話には語られていないことがあるだろう。小十郎一家は熊皮と胆を貨幣に変え、「米」などは少しもできず味噌もなかったから、九十になる年寄りと子どもばかり七人家内に持つていく米は、ごく僅かずつでも要った」ので、その貨幣で米や味噌を買っていたのである（荒物屋を仲介とした物々交換に近い）。ここでは穀物のことばかりが話題になっているが、タンパク質はどこから摂っていたのだろう。それは熊肉であるはずだ。田中 [2009] では現代に生きるマタギの人たちが熊肉料理を食べていることを記している。熊の身体のにひとつ無駄にしないことこそが、熊の死への精一杯の誠意なのである。『なめとこ山の熊』はこの肉食を隠蔽し、「熊皮と胆」だけを取る猟師・小十郎像を創りあげている。

(7)

もちろん伝聞や想像で語っていると主張する「私」であるから、すべてが想像であると言ってしまうたくもなる。熊たちの木に登って猟師を見守る姿は、自分たちに害をなす人間を避ける当然の行動であろう。それを「おもしろそうに」見送っていると「私」が勝手に意味づけしているともとれなくはない。死んだ後の気持ちはわからないが（人は自分の死の瞬間も他者の死に際の気持ちも知ることとはできない）、生きているときの「心持ち」はわかるというのも妄想だといって切り捨てることもできる。

しかし、最初に述べたように、本稿は草稿であること、伝聞や想像で語った物語であることを根拠に「妄想」「ありえないこと」と断定することはしない。

「私」が誰から伝聞したのか、そして熊と人間とが対話可能となったときにどのような現象が起きるのかを考えていく。

(8)

『なめとこ山の熊』が翻訳文学である可能性について付け加えておこう。熊たちの独自の言語があるとして、「私」にそれを伝えた者は「熊語」を

理解できる者であろう。あるいは「私」が熊語のテキストを読めたという可能性もある（熊の言葉は「私」の想像だと言ってしまったら、分析はそこで終わってしまう）。熊語で書かれた原『なめとこ山の熊』の可能性があるはずだ。

- (9) もうひとつの可能性は、小十郎でもあり熊でもあるという状態にある熊と小十郎であるので、書く「ぼく」である子熊が、共通語的言語で出来事を書き記し、それを「私」が読んで、再編成して語ったというものである。翻訳者が子熊（書く「ぼく」）なのか語る「私」なのかを明確にする点は今現在のところは、ないと言えない。

【参照本文】

・宮沢賢治『なめとこ山の熊』は、三省堂『新 言語文化』（二〇二二年）によった。〔 〕内は高木による註記、傍線などは高木による。手塚治虫『ジャングル大帝』は講談社コミッククリエイト「手塚治虫文庫全集」によった。

・『文学国語』の目次は、一般社団法人・教科書協会のホームページのリンクから調査した (<http://>

www.textbook.or.jp/textbook/05h_textbook.html): 二〇二三年一月二五日最終閲覧。『日本国語大辞典』はジャパンナレッジによった（二〇二三年一月三一日最終閲覧）。

【参考文献】

畦地一稀 [2019]:「メタフィクション」としての『なめとこ山の熊』の教材研究」（愛知教育大学大学院 国語研究 27号）

伊藤禎子・他 [2022]:「紙面ラウンドテーブル「現場と教育をつなぐ―新学習指導要領「言語文化」を通して」」（日本文学協会「日本文学 二〇二二年一月号」）

今福龍太 [2019]:『宮沢賢治 デクノボーの叡智』（新潮選書）

大塚常樹 [1999]:「なめとこ山の熊」論」（田中実・須貝千里編『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ 3 右文書院）

小森陽一 [1996]:『最新 宮沢賢治講義』（朝日選書）
須貝千里 [1999]:「……けれども私はさう思ふのだ●」
「なめとこ山の熊」で何が起っているのか」（田中

実・須貝千里編『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ 3』右文書院

高木 信 [2020]：『亡霊たちの中世 引用・語り・憑在』（水声社）

高木 信 [2021]：『亡霊論的テキスト分析入門』（水声社）

田中康宏 [2009]：『マタギ 矛盾なき労働と食文化』（榎出版社）

千葉一幹 [2003]：『賢治を探せ』（講談社メチエ）

坪井秀人 [1988]：『なめとこ山の熊』読みはじめ』（名古屋近代文学研究 6号）

戸川幸夫 [2021↑1958]：『マタギ 日本の伝統狩人探訪記』（ヤマケイ文庫・山と溪谷社）

（本学教授）